

ごみステーションシンポジウム（講演議事録）

○講師 北海道大学大学院 文学研究科 教授 大沼 進 氏

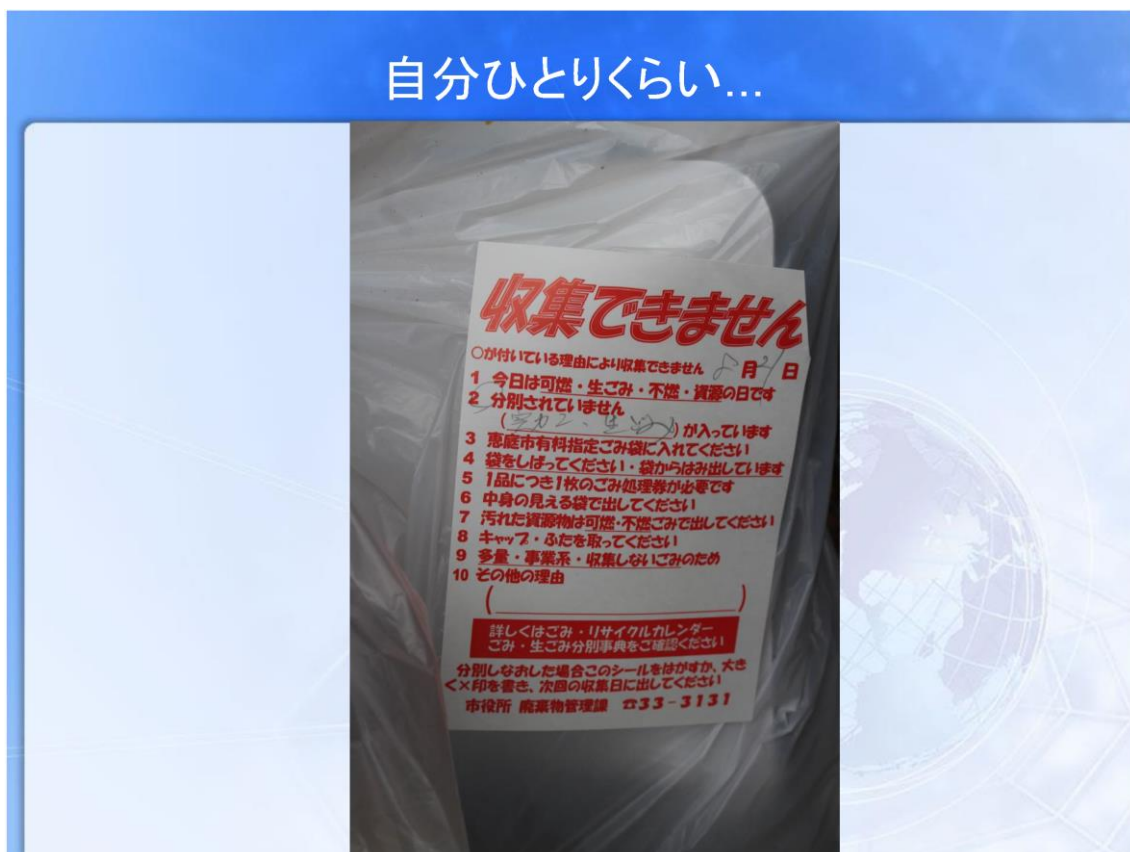
○講演テーマ 「地域力で解決！ごみ出しマナー」

ご紹介ありがとうございました。今ご紹介いただいたとおり、私は専門は環境心理学と社会心理学をやっております。所属するところは行動システム科学講座という名前ですが、行動科学、人間の行動であればとりあえず何でもデータをとって見てなんでも分析してみようというところがございます。今日の話はときどきグラフとか数字とか出てきますがその数字がわからなくても、わかるように説明しますのでそこは気になさらないでください。ごみ問題をやって面白いという言い方が適切なのかは分かりませんが、ごみを見ていると本当に人間のいろいろな側面が、人の社会のあり方の縮図が本当に見えてくるなというのが面白いと思ってやっております。人間って放っておくと利己的になって自分勝手になっていくという部分が残念ながらあります。しかし一方では、お互いに協力しあったり、助け合ったり、異質なものを認めたりといったこともちゃんとできる。そういう大げさな話を考えるのに、実はごみというのはちょうどいいもので、そんなような題材をもって取り組んでいます。

自分ひとりくらい...



こちらの写真をごらんください。ちなみに、いくつかお手元の配布資料にない写真などが出てきます。これはこの前に恵庭市さんのごみ収集場所を見せて頂いた時のものですが、真ん中あたりに収集できませんというシールが貼られています牛乳パックが入っていたり、ペットボトルが入っていたり、この日は確か資源物の回収だったと思いますが違いますよと。拡大してみると、「分別されていません。缶や生ごみが入っています」というシールが貼られています。



ときどきというか、残念ながらよく見かける光景だと思います。これは何が問題なんだろうとちょっと考えていきたいと思っています。一人くらい違反したからといって、直ちになにか深刻な社会問題になるとか、直ちにごみ処理が破綻するとか直ちに環境問題がひどくなるとか、そういうことはもちろんありません。で、一人ぐらいいいかと思っていると、2人3人いてもまあいっか、10人20人ならどうなんだ、99人ならよくて100人ならだめなのか、あるいは999人ならよくて1000人ならだめですか、これってそういう問題なのですか、ということにだんだんぶち当たっていきます。そして実際に大勢の人がルールを守らないと一体どういうことになるかという、こういうことになります。

大勢の人がやり出すと..



これが実は札幌市になるのですが、札幌市で2008年にごみの有料化をしたのですが、その直前に駆け込み排出というのがものすごく出てきました。ご覧のとおり違反シールですとか、非常にごみステーションが溢れかえっているということがありました。普通ですとごみの収集というのは朝8時半までに出して下さいねとなっていて、収集は遅くても10時から11時ぐらいには終わり、少なくとも午前中にごみの回収が終わってこないと住民の方から回収はどうなっているのかと、クレームが来るから必死になって集めているわけですが、このときは収集がそれどころではなくなって最後のパッカー車が清掃工場に入っていくのが、夜の11時を回っていたというような状況になってしまいました。もちろんごみの収集が遅れたら、単に迷惑なだけじゃなくて、カラスが荒らすとかそんなことも増えてしまいます。もちろん直接の犯人はカラスなのですがこういう状況を作り出しているのはそこに暮らしている人々です。こんなふうに関心を持って一人ぐらい守らなくても直ちに大きな問題にはならないけれどもみんながそれを守らないと本当に世の中收拾つかなくなって、大変な問題になってしまうということはいろいろあります。ちなみに私が恵庭市のごみを夏に拝見させていただいて、すごく感心したことの一つに、ペットボトルを出すときに、皆さんフタを外してラベルを剥がして出していることにはかなり驚きました。札幌市もちろんお願いはしているのですがそこまでちゃんとやっている人、もちろんやっている人は沢山いらっしゃるのですが、そこまで徹底されてはいないと思います。もちろんペットボトルは全国の自治体でちゃんと分別して集めて下さいと言っていますが、札幌以外の自治体も何箇所か見て

回っていますが、これほど徹底しているところは素晴らしいと思いました。

話は戻りまして、ごみ問題も含めて環境にやさしい行動を何でできないんだろう。頭ではこうした方が良いというのはおそらく分かっている。分かっているけど行動が伴わないという問題があります。アンケートなんかをとると環境問題は大事だと思いますか、深刻だと思いますかと質問したら、実際 80%90%の人がそう思うと答えるわけですが、実際に皆さんこういう行動していますかと質問するとほとんどの人がしていないと答えます。アンケートではよく建前を答えているのではないかとか、社会的に望ましい答えを書いているのではないと言われるのですが、そういうのを差し引いて考えても本当に大事だと思っている人もやっぱり実際に行動にできないということが多々あるということが知られています。

こういう問題があったときにはそれは大変だね、じゃあどうしようかということが問題になります。必ず出てくる答えが、普及啓発活動をちゃんとやりましょう、マナーの問題だからマナーを守りましょうねという話です。もちろん正論なのですが、じゃあ、誰にどこでどうやってやったらいいの、そういうことに取り組んでみたけど本当に効果あるののないの、一生懸命やってみたけど効果なかったとかでは、それはちょっと寂しいですし、本当にこの人にやって欲しいけど、その人には届かない、一生懸命やっている人に一生懸命やって下さいといってもそれもなんだかなと、ちぐはぐしてしまいますので、これをどうやったらいいんだろうというのをこれから考えていきたいと思います。もう一つ必ず出てくるのが、早期からの環境教育をしましょうねということです。もちろんそうです。小さいうちから環境教育をしましょうね、学校で学びましょうねというのは非常に正論です。最近小学校のうちからきちっと学校でいろんなことを学ばせてくれますし、学校の先生もすごく一生懸命やって下さっています。だけどそれはすごく時間のかかることですし、既に大人になってしまった人はどうすればいいのでしょうか。今の日本は 30%が高齢者です。その人たちはどうすればいいのか、高齢者の方々といっても介護ですとかお手伝いが必要な方も元気な方も居ます。実はですね、いろいろアンケートをしてみると、分別とかめんどくさい、わかんないという方は 40 代とか 50 代の男性で、その人たちはもう手遅れだからどうしようもないのかといっても、そういうわけにはいかないのです、環境教育をやるとしても遅すぎるのです。

(配布資料ページ 3)

今日は一つだけ皆さんに覚えて帰ってほしいことがあります。「社会的ジレンマ」という言葉です。先程お話しましたとおり、一人ぐらい分別しなかったからといって直ちに深刻な問題になるわけではないけれど、みんなが協力をしないと、みんながルールを守らないと大変なことになってしまうという問題、これが「社会的ジレンマ」です。もう少しちゃんと説明をしていくと、人間はやっぱり面倒くさいことをしたくない、手間かけたくない、不快なことをしたくないというのが、第一にあります。こういう側面を個人的コストという言い方を心理学ではします。コストというとお金の話に聞こえますが、心理学ではめんどくさい、いやだなということもコストといいます。逆に、得をしたいな、楽をしたいな、便利なもの

を使いたいなといったことを個人的な便益を迫及するという言い方をします。一人ひとりがルールを守らない行動をすることはけしからんが、人間ってそういう側面あるよねってことは認めましょう。一方で、一人ひとりの行動の影響は小さいけれど、その行動の積み重ねが社会全体として大きな影響を受けるということがあります。ごみでいえば、皆様がちゃんとルールを守らないとごみの収集が破綻します。今恵庭では焼却をしていないですが、他の自治体で焼却してたり、再資源化したりしていますが、そういった循環型社会を作っているものが皆さんが協力していかないと破綻します。このような社会全体で影響を受けるものを、社会的コストと叫びます。もっと極端なのは、地球温暖化とか気候変動とか、そういう問題へ発展します。逆にごみ収集処理が適正に行えとか、それによって自治体の財政の負担が減るとか、社会全体でみたらいいことが起こる。これを「社会的便益」といいます。こういうふうによりひとりが便利さや快適さを追求した結果、面倒なことをちょっとサボったりということが積み重なった結果、社会全体にとって不利益が起こったり、社会全体にとって望ましくない結果になったりする。これを社会的ジレンマと呼びます。この言葉を覚えていただければ私の今日の授業はこれでもう終わりとなるのですが、話はこれからとなります。じゃあ、この社会的ジレンマという問題があったときにどうしたらいいのでしょうか。皆さんちゃんとルールを守ってください、ちゃんと分別して下さいと呼びかける事はもちろん大事です。しかし、ただ呼びかけるだけではあまり効き目は大きくありません。まったくなくはないですが、呼びかけることも重要なのですが、しかし、どうしても自分一人ぐらいとってしまう人がこの世の中にはいてしまいます。そうすると、良心に訴えかけるだけですと正直者が馬鹿を見るということになりかねない、一生懸命まじめに協力している人たちがばかりが大変な思いをする。例えば、どこにいても町内会の方とか、お世話してくださる方、収集にあたっている方などすごく一生懸命やって下さっている。すごく一生懸命やって下さっている方ばかりが大変な思いをして終わってしまう。果たしてそれでいいのだろうか、そうならないような仕掛けができないかなということ、じゃあどうやってそれを考えていけばいいのでしょうか。簡単にまとめると、いろんな行動をする、いろんな働きかけをすることでコスト意識を変える。面倒だとか楽したいというのは一人ひとりの感じ方の問題です。分別をしてもちっとも大変だと思わない人は思わないし、同じ分別のルールだとしても、すごく大変で面倒くさくてできないという方も一部にはいます。そのコストの意識を変えるんですね。その社会の仕組みを造っていく、とにかくごみを減らしましょう、循環型社会を作っていきましょう、そういったところでコストがかからない社会を作っていきましょう、という方向にどうやったら乗っ付けさせられるかということを考えていけるようにする社会の作り方があるはずだということです。これはあくまで一人ひとりの頭の中だけで意識の問題だけじゃなくて、社会の作り方の問題だと考えるといいかと思えます。こんなエピソードをちょっと話したいと思えます。ドイツという国は環境先進国で、ものすごく分別がちゃんとしています。その反対でアメリカでは合理的といえれば合理的で、分別のかけらもなく全部一緒に集めて全部燃やして全部埋め立てるといった経済の効率

性であれば合理的な社会を作っている。そういう二つの極端な社会があります。アメリカ人がドイツに行って暮らしました。ドイツは生ごみ分別します、紙分別します、ペットボトルもちろん分別します。そんな風にどんどん分別しなければいけない。ドイツに移り住んだアメリカ人は、もうこんなことやってられない、ドイツでは暮らせないと変わったようです。じゃあ、反対にですね、ドイツからアメリカに移住したドイツ人、これ分別したいけどどうしたらいいの、これ持っていきたいけどどこに回収拠点あるのときょろきょろしています。果ては、電池とか蛍光管のようなこんな危険ごみを分別しないで一緒に混ぜるなんてけしからんということで市役所とかに聞いてまわって最後にこんなところには住めないみたいなことを言い始めたのですね。もちろんアメリカ人とドイツ人の人のよさや自分勝手さが違うかということ、そんなことはありません。一人ひとりと話していけば、人間ですので話せばわかることたくさんあります。まあ、違う考え方があれば認め合う。そういった文化は普通の人であれば持っています。普通の人としての感覚はちゃんと持っているんだけど、社会の作り方の形でめんどくささを感じるころは違ってくるというエピソードでした。じゃあ皆さんこれをどういうふうがいい方法、何がいい方法かって言われると思いますが、ここではきちんとごみの処理がなされ、資源が利用されていく、そのような社会になっていけばいいなという話です。

(配布資料ページ 4)

長い前振りにずいぶん時間かかってしまいましたが、今日のお話では、まずは問題の所在ということで、社会的ジレンマの話をしました。この後 2 つ目にごみや資源の分別を何故した方がいいのかという話をさせていただきます。その後、3 番目が地域力を育てようという話です。今日のメインテーマが地域力で解決ということなので、一体地域力は何で大切なのか、どうやっていけばいいのという話をちょっとします。そして最後に、共働きの輪を広げてとありますが、ちょうど最初のご挨拶でもあったとおり、特に集合住宅は非常に悩ましい問題を抱えてらっしゃって、おそらく今日はその辺りに関心のある方がずいぶんとお見えになっていると伺っております。今日はマナーの悪い集合住宅対策としてこんなことをやってみましたという話をしたいと思います。

(配布資料ページ 5)

まず最初に、何なぜ分別区分が多い方がいいかというところですが、ごみ処理とか、資源循環の効率をあげるためには、やっぱりちゃんと分別したほうがいい。リサイクル率とか数字で何パーセントとか見えないところとして純度の高さ、リサイクルの質の良さというのがあります。例えば、缶から缶へというのは純度が高い、リサイクルの質が高いという典型例の一つだといわれています。反対の極端な例をいいますと例えばプラスチックです。容器包装のプラスチック皆さん分別して集めていて、あれはリサイクルといっていますが、結局何になっているかということ、多くは燃料として燃やしています。あるいは、せいぜい棒杭にな

ります。法律上の定義の上ではリサイクルしています、リサイクル率何パーセントですとなっています。それはそうなのですが、質的にいいのかなという感じがしなくもないですね。ペットボトルはペットボトルになったりペットボトルの繊維として使ったり、いわゆる質のよい使い方ができたりします。それから白色トレイですね、こちらも純度の高いものであれば、トレイtoトレイのように再資源化できるものとなります。よく、再資源化するのはいいけど、結局再資源化する時に余計なお金がかかったり、余計なエネルギーがかかるとよく言われますが、ライフサイクルアセスメントとあって、モノの寿命が尽きて最後は空気中に大気に燃やされて流れていくか、地面に埋められるか、そこに至るまでのモノの一生、例えば石油からペットボトルなどが作られて、途中で確かにエネルギーが注入されたり、あるいはコストがかかっていますが、長い期間使われて最後には燃やされるなり、埋め立てられるなりと、時間軸で考えて見ましょう。あつという間に使ってあつという間に燃やすと寿命が短いわけで、寿命が短い中でもものすごく大量のエネルギーを投資している。ライフサイクルでどれだけ長い時間使えたのかというようなことを計算に入れると、やはり純度が高いリサイクルをした方がいいということですね。ただそのときにコストが問題になります。これの一番難しいところは選別をしなければいけない工程がたくさんあるということです。AIとかロボットとかいろんな技術発展しており、もちろん廃棄物業界でも出来るだけAIを使う、出来るだけロボット使うという技術は日進月歩です。でも、やっぱり一番重要なところは未だに手選別が主流で、ここをきちんとしないと純度の高いリサイクルができないことになってしまいます。ここにかかる人件費やコストを抑えるには最初の段階で皆さんにきちんと分別して頂くのがコストの面で一番ポイントになってきます。

(配布資料ページ 6)

実際に皆さんにちゃんと分別して頂くとごみ処理費用を削減できます。徳島県の上勝町では分別を 34 区分にして町の財政を約 1000 万円削減、それから資源の売却益も 300 万円に上昇したというところもあります。この徳島県上勝町は人口 2000 人くらいの非常に小さな町ですが、34 種類の分別があり、しかもここは山あい小さな道路しかなくて大きな収集車、パッカー車は入れないため住民が直接ステーションのあるところに持参するという収集方法になっています。ここも過疎が進んでいるところなので、高齢化率が 50%近くで、そのぐらいお年寄りばかりでもみんなちゃんとルールを守っています。みんなにお話聞くと、慣れたら簡単だよとってやろうと思えばちゃんとできている。

(配布資料ページ 7~9)

こんなふうになんとできているところをもうちょっと数字でお話しようとする、愛知県の碧南市というところがあります。愛知県の碧南市では 25 種類の分別と立ち当番制度というものを導入しています。もちろん町内会説明会とかいろんな形の説明会を 25 種類分別するときにはやりました。面白かったのは、普通の自治体は同時にやるのですが、碧南市は

広がったので、北地区、中地区、南地区にわけてこの3地区に順次導入していったので、ちょうど導入して一年経ったときに、まだ導入前の地区と、まだ導入して3ヶ月しか経っていない地区と比較ができたので調査してみました。導入前だと25種類の分別はいい制度だと思いますかと聞くと、導入前はうーんと思うが、導入後時間が経つほどいい制度だと思っている。じゃあ何でいい制度だと思う人が導入後増えるかという、社会的便益、つまり、ごみが減らせるとか埋立地の延命化が図れるということが特に説明会に参加しなかった人の中で、社会全体にとって望ましいと回答する人たちが増えていった。逆に個人的コスト、これは上に行くほど面倒じゃないと見るのですが、ゆるやかですが、やっぱり時間が経つほど面倒じゃないという人は増えている。このようにだんだんとやっていくうちに手間や面倒が少しずつ下がって行って、これはやっぱりごみを減らすのに大事なんだというのが増えていったという話です。ただし、分別をしていくと、ほっといていいというわけではないのです。説明会をちゃんとやっていったり、立ち当番をするなど様々な取り組みをすることで効果的になります。立ち当番は北海道だと冬になると厳しいのですが、内地ですと比較的可能です。立ち当番って見張っているわけではなくて、何をどうすればいいかというとおしゃべりをしているんですね。分別が25種類もあると、みんながみんなこれはどれに入るのかわからないという話をしていますが、やってるうちに分かるようになっていきます。それはおしゃべりをしながら分かるようになっていくのですが、やっていくうちにわかるようになっていくと、「ああそうなんだ」となると面白いし、だんだんわかるようになっていくと手間じゃなくなっていく。そういったおしゃべりの場が必要だという話でした。

(配布資料ページ 11)

次のお話では地域力を育てようという話です。地域力を育てるといってどうしても身構えてしまって、じゃあみんなでごみ拾いをするぞとか、みんなで花植えをするぞとか思ってしまうかもしれません。もちろんそういう活動をすることも大事なのですが、そういうふうに身構える前に、まず井戸端会議のような肩の力を抜いたところからはじめたらいいかと思います。井戸端会議というのはですね、言葉にあるように、昔は水道なんかなかった時代に、家庭で使う水を井戸へ汲みに言って、井戸で水を汲んだらさっさと帰ればいいものを、そこでぺちゃくちゃくだらない話を延々とするのが井戸端会議です。その井戸端会議をしたからといってなにか問題解決ができるわけじゃありません。井戸端会議したからといって問題が整理されるわけじゃありません。だけど井戸端会議は大事です。なぜ大事かという、社会規範促進機能や犯罪抑止機能というのがあるのです。例えば、直接的な効果としてこんなものが軽犯罪の抑止につながっていきます。犯罪心理学というものをやっている人から聞くと、空き巣をする人は必ず下見をするそうです。下見をしない空き巣はいないそうです。このときに人の目があるとか、人がこの辺で立ってしゃべっているとかがかなり抑止力につながるそうです。もっと言うところにはとか挨拶をするとかなりひるむそうです。挨拶とか声をかけるというのはそんな意味もあります。空き巣以外にも、人の目があるだけ

で不道徳な行動が抑制されます。それから、問題発見機能というのがあります。問題解決にはならないんだけど、まず問題に気づく、そしてそれが誰かに伝わるという伝達力が井戸端会議は素晴らしいんですね。この井戸端会議が機能しないとどうなるのか。最近社会問題でもいわれていますが、孤独死の問題、児童虐待の問題、その発見が遅れた、ごみの問題で言えばごみ屋敷ですね。こういう問題があるんだけど、そこに誰も気がつかない、気がつかない間にどんどん深刻になっていったというのが現代社会の大きな問題となっています。逆に井戸端会議は手遅れになる前に誰かが見つけてくれる。これが実は井戸端会議の重要な機能なんですね。じゃあどこで井戸端会議をするのかというのが次の問題になります。今は水道が全国整備されていますので、いまだに水を汲みにいってらっしゃる方はいないと思うので、じゃあどこで立ち話をするのかというと、一つはごみを出しに行くときですね。ごみを出しに行くときというのが、孤立化が進んだ現代都市における井戸端会議の最後の砦かもしれないということです。恵庭市は戸別収集になっていますけど、お隣のごみステーションがすぐ目の前に見えてますよね。たぶん一戸建ての方々は見た感じですとちゃんとお互い会ったら意識しあってるのかと思います。集合住宅はたぶん一つのアパートとか一つのマンションで一つのごみステーションと大体なっているのでそういう場になりえるのかなと思っております。なので、まず地域力を考えたら井戸端会議から。誰でもできます。誰でもできますというと、男性の方はおしゃべり苦手だという方がときどきいらっしゃるのですが、そうおっしゃらずにごによごによとしゃべるところから始めてみればと思います。

(配布資料ページ 12)

こちらが今言った話で、非常に乱暴に言えば地域でそういった活動があるほど犯罪が少ないですよということを示している表です。この写真はホームページから勝手に写真を拝借していますが、花のコンテストでしょうか。これは市民活動とかボランティア活動が活発だと犯罪が起りにくいですよというデータの紹介です。

(配布資料ページ 13)

これは別の調査ですが、どれくらいその地域にボランティアグループがあるか、ボランティアに参加している人は何人いるかというボランティア密度とかを調べて、ボランティアがたくさんあるところほど、リサイクルに協力している人が多いことを示しました。ここでのリサイクルは店頭回収とか行政が収集しないモノです。それにどれだけ協力的かを調べると、ボランティアが活発な地域ほど、ボランティアをやっていない人も協力しているという結果が出ています。

(配布資料ページ 17)

そういう意味で地域活動とか、花を植える活動とかが大事だよねという話になります。そ

ういう地域の活発さというのが本当に多くの人の協力につながっているのかということをもう少し詳しく分析しました。特にその地域への愛着というのが地域活動と密接に関連しているというのがこちらの図になります。集団資源回収にどれだけ参加しているのかというときに、どこでやっているかわからないと参加できない、あるいは参加したいと思っても、わずらわしいと思っている方は参加しようと思わないし、逆に楽しい面白いなうれしいなと思っている人は参加する。どうやったらわずらわしいと思わずに楽しいうれしいと思う人が増えるのか。地域の活動が多いほど、どこでやっているのかがわかる、地域の活動がわずらわしくない、そこから楽しいねという形が広がっていく。そのような形で地域の活動が活発であるということも非常に大事だよというお話です。

(配布資料ページ 14~15)

それから、周囲の環境をきれいにしておくのも大事だよという実験の紹介をします。これはアメリカのある図書館で、図書館を出てから駐車場まで数十メートルあるのですが、図書館から出てきて帰ろうとする人が車に向かっていく途中にちょっと仕掛けをしておくというものです。まず初めに、周囲が散らかっている場面と散らかっていない場面と二種類の場面をその日によって用意しておきます。図書館から車に向かっていくときにある人とすれ違います。そのすれ違う人が何をしたかというのを実験的に変えてみたというのです。一つ目は図書館から駐車場に向かっていく人の目の前ぐらいでファーストフードの袋をポイ捨てしてすれ違っていく条件。二つ目はすれ違う人が逆に散らかっているごみを拾う条件。三つ目はただ何もせず何食わぬ顔ですれ違う条件。その3条件を用意します。さて、対象者の人は自分の車のところへ行くと、車のワイパーのところにチラシが挟まっています。とても邪魔なチラシでどう考えてもただの迷惑な紙です。近くにゴミ箱はありません。その場にそのチラシをポイ捨てるか、車の中に持ち込むか、おそらく車の中に持ち込んだときは降りるときにちゃんと捨てるんだろうと考えてですね、果たしてどうだったのかという結果がこちらになります。ただ何もせずにすれ違っただけだと、何もしない場合は約40%の人がその場にポイ捨てしていたということです。反対に、ごみを拾っている人を見た直後だとポイ捨てる人がものすごく減るということです。一方でごみをポイ捨てる人を見たというのが少し微妙で、周りがきれいでポイ捨てる人を見た場合はあまりポイ捨てしない、周りが散らかっている状況でポイ捨てる人を見た場合はあまり抑止力が働かない。周りがきれいな状況でポイ捨てる人を見ると、ポイ捨てるのはあまりよくないなという気持ちもちが働くけど、周りが散らかっている状況でポイ捨てる人を見ると、あれは良くないなと思いつつ回りが散らかっているし、まあいいかとなる。そのような形で影響する。そんなふうには、周りの人がポイ捨てるか、周りが散らかっているかきれいかという状況は非常に影響をするという話です。

(配布資料ページ 18)

それからですね、人と人がつながっているというのがどれだけ大事かという話もしておきます。人と人がつながっているというのは、ただそれだけだけれどもけっこう大事なことがたくさんあります。世の中狭いねとよく言われます。初対面の人としゃべっていると、実はこの人とこの人は知り合いだということが多々あります。これを実験した人がいて、ある封筒にあて先が書いてあり、切手が貼ってありません。これを手渡しでこの住所に届けて欲しいということをやりました。最初にやったミルグラムという人はアメリカの東海岸の人に西海岸のあて先が書かれたこの封筒をすみませんが届けて下さいといいました。全く知らない人だけど手渡しで届くのかというと、6割か7割がちゃんと手渡しであて先の住所へ届いた。しかも、何ステップぐらいで届いたかという、だいたい5ステップから6ステップぐらいで届いたと。日本でも同じ実験をやった人が居て、日本でもだいたい到達して、4ステップから5ステップぐらいでちゃんと知らない人のところへ到達したという話です。これは話は簡単です。仮に皆さん知り合いが百人いたとします。知り合いの知り合いは百×百で一万人。知り合いの知り合いの知り合いは百×百×百で百万人ということになります。そうすると、6ステップぐらいで日本中の人と全員とどこかで知り合いでつながっているはずだということになります。非常に不思議な話ですが、確かに調べてみると機能する。今はインターネットでつながっているから同じだろうかというのをやった人がいます。ところがインターネットだとまったく届かない。0.何%の人しか届かない。インターネットの方が世界中の人とつながっているはずだが、インターネットでこれを届けて下さいといってもちっとも届かないのです。それからですね、人とのつながりが少ないほど早死にすると二つ目に書いていますが、これは1970年代の非常に有名な研究で、1970年代なので70歳まで生きて長寿な時代です。その時代にどういった人が長生きしているかということ、人付き合いが多い人ほど長生きしていて、人付き合いがない人ほど早く亡くなる。そんなことを発見した人がいます。そして災害復興に社会的ネットワークが有効に機能する。東日本大震災のときは絆という言葉が非常にはやりましたが、それ以前に中越沖地震や阪神淡路大震災が発生しました。この人は阪神淡路大震災のときに復旧が早い地域と復旧が遅い地域を調べてみたところ、社会的ネットワークがある、近所づきあいがあるとこほど早く復興し、希薄なほどなかなか日常生活が取り戻せないということがわかっています。それからつながりが大きいほど環境配慮行動をしているというのもあります。

(配布資料ページ 19)

それからですね、社会的ネットワーク、つながり方には二つのタイプがあります。強い結びつきと弱い結びつきです。強い結びつきはストロングタイというんですが、いつも顔を合わせる人です。強い結びつきは困ったときに助けてくれるという意味では非常に大事です。サポートが得られるという部分では強い結びつきが大事です。ただし、あまり強い結びつきだけだと、内向きになったり排他的になり、よそ者を排除したり、異質な価値観を認めなく

なってしまう。会社への忠誠心は強いけども反社会的なことをしてしまうというようにもなってしまう可能性があります。そこでもう一つ大事なのが弱い結びつきであるウィークタイです。ウィークタイとはいつもあまり一緒にいない、たまに連絡を取る、なんとなく知り合いという感覚のものです。この弱い結びつきの方が、新たな情報や行動様式をもたらしたり、異質なものと遠いものが結びつくことで新たな価値を生み出したりにつながります。この両方がうまくバランスよくあることが重要という話です。

(配布資料ページ 20～25)

ごみの話に戻り、どのくらいコミュニティがつながっているかが大事なのかを調査しました。この調査では、ごみステーションの管理状況が、地域のつながりとも関連していることを示しました。地域のつながりが、地域の特徴、花があるとか公園があるとかその全部お互いにつながりあっているということ、データを表現できたよというお話です。私は学生たちと一緒に札幌中のごみステーションを観察してまいりました。八百ぐらいのごみステーションを見て、一個一個のごみステーションがどれぐらいきれいか汚いか、ルールが守られているか守られていないかを見ていってグーグルマップにプロットしていきました。たくさんプロットしていくと特徴が現れ、きれいなごみステーションが固まっているエリアと、汚いごみステーションが固まっているエリアがわかるので、その特徴的なエリアを取り出し、もう少し詳しく調べてみました。もう一回きちんと分別されているか、時間が守られているかをチェックしてみたり、ここに住む人にアンケートをお願いしたりして、どれぐらいごみ捨てをできていないですかと聞いたんですね。時間外に出したり、一緒くたに出してしまったといった、あえて良くない行動を聞いてみたり、近所にどれぐらい知り合いが居ますか、隣近所の人があるかご存じですかといった、付き合いの程度を聞くようなことをしました。そしたら、きれいなエリアの方が適正排出しているし、汚いエリアの方が不適正排出しているとなりました。そして、きれいなエリアの方が人のつながりが大きいし、汚いエリアの方が人のつながりが少ないとなりました。実際のごみステーションの状況とアンケートの状況を見ると、時間外に出してしまったり、分別を守らないで出してしまったというのと、実際のごみステーションの状況はある程度相関していますが、それよりよりも、地域のつながり、近所付き合いがどのくらいありますかということのほうが、よりごみステーションの状況がよく予測できた。つまりあなたはちゃんと分別してますかと聞くより、あなたは近所に何人ぐらい知り合いがいますか、どのくらい近所付き合いしてますかと聞く方がごみステーションが汚いかきれいかが予測できるという分析結果です。ついでにいうと、一人暮らしが多い地域のほうがごみステーションが汚く、家族とか大勢で暮らしている人が多いところの方がごみステーションがきれいという結果も出ています。それと、例えば公園があるとか、人の集まりがあるとか、掲示板が目立つところにあるとかを調べてみると、そういったものが多いところのほうが、ごみステーションがきれいに保たれている。そんなこともデータで示せました。

(配布資料ページ 27～32)

共働の輪を広げてより積極的な取組というところが地域に大事だということがわかりました。それではどうしたらいいでしょうか。まずは挨拶からはじめましょう。先ほど、挨拶をすると空き巣がひるむという話もしました。ちょっと古いのですが、空き缶の回収のときに黙って受け取るのとありがとうとって受け取るのでは、ありがとうとって受け取ると空き缶回収のリピーターが増えたという結果もあります。あと、僕らがやった調査で、レジ袋を使いますかと声をかけるだけで、レジ袋の辞退率が上がったという調査もあります。実は北海道に暮らすとほとんどのスーパーがレジ袋を有料化していますが、まだまだ日本全体では珍しいです。これは北海道で有料化を導入する前の話です。

まずはじめは店員さんが黙ってレジ袋をいれていた。それからレジ袋をお使いですかと声かけをしてもらい、お客さんがくださいというまでレジ袋を入れないということをアクションしてもらいました。それでどのくらいレジ袋の辞退率が変化したかということのを数え、それからアンケートも同時にしました。

辞退した人を数えるとばらつきはあるけれど、声かけを一週間続けるだけで辞退率は5%ぐらい上昇しました。これは数字が大きいほど辞退率に効果があったと思って下さい。アンケートの結果からどれがどのくらい有効だったかを見ると、声かけが抜群に効き目があったと出ています。レジ袋は、今やっとなら日本全体では有料化しようという議論が出てきています。ちょうど最近マイクロプラスチックの問題が話題になったりしています。北海道も例外ではなく、コンビニや百均、ドラッグストアではまだ無料でレジ袋をくれますので、そういうお店にも広がったらいいなと思います。

(配布資料ページ 33～36)

最後の話です。集合住宅のマナーの悪いごみ対策ということで、最初のご挨拶でもあったとおり、特に一人暮らしをしていて近所づきあいがいい方はごみ出しのマナーが悪い。それを何とかしなければならいけれど、一生懸命町内会の会長さんはじめ、一生懸命取り組んで下さっている方、特に市民団体の方々ですね、いろんな熱心な方々が取り組んで下さっているんだけど、近所づきあいのない方へはなかなか到達できない。ではどうしたらいいのか。これは札幌市と一緒に、管理会社さんの方に社会実験をお願いしたときのものです。できるだけひどいところでやりたいと申し出たところ、ひどいところはなかなか協力して下さらないという頭がいたい問題があったのですが、それでも6軒の建物がいいよとって下さったのでそこで社会実験を行いました。

実際にどのくらいひどいかというと、曜日違いごみがある、全然違う曜日にごみを出している、不適正率100%という日もあったりとか、違反シールがいっぱいという状況のごみステーションで社会実験をやりました。

不適正の内容を見ると収集が終わった後に出しているとか、全然分別していないなということがわかりました。それから、4週間あるアクションをしました。まず全体の共通のア

クッションとして、エントランスにごみカレンダーを貼る、それから住居者のポストに守ってねというチラシを入れる。それと最初に清掃事務所の人をお願いをしてごみステーションを全部きれいにしてもらおう。清掃事務所の方にも重点的に見回っていただくというお願いをしました。これが 6 つのステーション全ての共通の取組です。それとは別に情報フィードバック条件では、チラシやごみカレンダーのほかに、3 週間経ったときに「皆様のご協力のおかげで違反ごみが減りました。改善しました。」という張り紙を貼りました。これが一箇所。それから入り口のところでうちの学生が「おはようございます」と挨拶をしている条件を用意しました。

その結果どうだったかという、アクションをしている間は、なんとなく不適正排出率が減っていくのですが、挨拶をした条件と掲示のみをした条件ではリバウンドしてもとに戻ってしまいました。しかし、情報をフィードバックした条件では 3 ヶ月ぐらい追いかけていくと、違反ごみが減少していく傾向となりました。つまり顔見知りじゃないけど同じところに住んでいる人たちがごみ出しマナーを守るようになった、みんな協力するようになったというシグナルが、自分もちゃんとやらなければいけないと考える効き目になったと解釈しています。そういうところで自分と同じマンションで住んでいる人がちゃんとやっているという情報はそれなりに大事なのかなと思います。

(配布資料ページ 37)

おそらくここに来てくれている皆さんは熱心に取り組んで下さっている方が多いんだと思います。そういう方々にはもっともっと環境にいいこととしていく、ごみステーションをきれいにしていく、ごみ問題を解決していくということにがんばって頂きたい。ただし、その一部の人たちだけががんばるのではなく、普通に暮らしている大勢の方々が協力するという仕掛けができたらいいなと思います。これで終わりにしますが、地域づくりはいろんなつくり方が可能ですし、いろんなアクションを仕掛けていって、ただ単にマナーを守ってくださいではなくて、一人でも多くの人を巻き込んでいく、そういうことを仕掛けていくそのために社会実験などもうまく使っていただければと思います。